

資料集

ゆっくりお読みいただけるよう、展示資料の一部を複写いたしました。

なお、同じものを、当研究室の HP からダウンロードしていただけます。紙の資料ご不要の方は、ご利用ください。

一覧

(冒頭の数字は展示番号)

7.昭和 13 年(1938 年)日本宗教学会 委員会報告・会計報告

現在の日本宗教学会の会計(2015 年)

10.姉崎正治の国際連盟演説(1936 年)

11.第九回国際宗教学宗教史会議日程案

13.ICHR 東京大会(1958) RESEARCH TOUR TOKYO(封筒)

14.ICHR 東京大会(1958) GUIDE BOOK TOKYO(表紙・目次)

15.ICHR 東京大会(1958) RESEARCH TOUR PAPERS -TOKYO-

16.IAHR 東京大会(1958) IMPORTANT NOTICE

25.岸本英夫教授密葬式次第

29.東京大学附属図書館長教授 故岸本英夫葬儀次第

30.東京大学附属図書館長 岸本英夫教授葬儀式場略図(図書館葬)

34.原一郎「故岸本教授の『無宗教葬』について」,『創造』第 15 巻・第 3・4 合併号掲載

昭和 13 年（1938 年） 日本宗教学会 委員会報告・会計報告

昭和十三年

十二月八日決定

○役員

○会長 姉崎正治

○会計監督 鈴木宗忠 矢吹慶輝

○委員六名

小口、深川、梶芳

京都(金光)

東北(小田原)

大正()

○委員の手當は当分實費とす。

帝大関係

○新に評議員トナル人々

旧宗教研究会委員

福島直四郎 東京 宮本正尊 東京

干潟龍祥 九州 長井眞琴 東京

久松眞一 京都

金倉園照 東北

小野島行忍 九州

佐藤泰舜 京城

山田龍城 東北

石津照璽 東北

日本宗教学会豫算

収入

普通会費 300 人=1500 円 }
継続会費 60 =500 円 } 2100 円—

計 2100 円—

支出

会誌印刷代
普通年 380 円×3 回=1140 }
特輯年 500 円×1 =500 } 1640 円—

会誌送料 35 円×4=140 円—

通信費 { 集金委託料 42— }
 { ソノ他 28— } 70 円—

集会費 20 円—

編集手当 }
事務手当 } 1 回 50 円 200 円—

雑費(印刷代、文具代、封筒代 等) 30 円—

計 2100 円—

現在の日本宗教学会の会計（2016 年）

2015年度 日本宗教学会 決算報告

<収入>		<支出>	
会費	17,500,590	会誌直接刊行費	3,760,387
賛助会費	750,000	会誌発送費	623,040
預金利子	2,993	編集諸費	305,604
前年度繰越金	10,250,789	第74回大会費用	1,200,000
		日本宗教学会賞賞金	200,000
		学会賞諸費	97,004
		会合費	1,381,155
		通信連絡費	318,060
		事務用品費	236,940
		印刷費	102,462
		本部費	4,691,474
		関係学会費	291,874
		事務所費	1,362,675
		ホームページ運営費・ データベース関連費	1,374,848
		英語版電子ジャーナル費	587,923
		次年度繰越金	11,970,926
計 28,504,372		計 28,504,372	

2016年度 日本宗教学会 予算案

<収入>		<支出>	
会費	17,000,000	会誌直接刊行費	4,200,000
賛助会費	750,000	会誌発送費	700,000
預金利子	1,000	編集諸費	350,000
前年度繰越金	11,970,926	第75回大会費用	1,200,000
		日本宗教学会賞賞金	200,000
		学会賞諸費	80,000
		会合費	1,500,000
		通信連絡費	350,000
		事務用品費	250,000
		印刷費	150,000
		本部費	4,500,000
		関係学会費	300,000
		事務所費	1,500,000
		ホームページ運営費・ データベース関連費	1,300,000
		選挙関係費	170,000
		予備費	12,971,926
計 29,721,926		計 29,721,926	

姉崎正治の国際連盟演説（1936 年）

音声はミシガン州立大学 Vincent Voice Library 所蔵。

説明には、「姉崎正治が、国際連盟において、産業主義・資本主義・カルヴァンについて東西文明間の緊張関係をたどりつつ演説した」とある。

高橋原氏によれば、

姉崎は、東大定年退職後、新渡戸稲造の遺志を継ぐ形で国際連盟の学芸協力委員に就任した。姉崎の旅行記によれば、1936 年の 7 月 13 日からジュネーヴで開催された同委員会に出席している。

西洋の科学文明と東洋の精神文明の対立と見えるものは、実は東西両洋がそれぞれに抱えている近代化の問題でもあるという視点から、近代文明そのものの行き詰まりを考えようとするものである。宗教学的学識を踏まえた国際協調主義という姉崎らしい発言であるが、このような穏健な主張が力を持ち得なかったのは歴史の示すとおりである。（高橋原「資料紹介 姉崎正治の国際連盟演説（1936 年）」『東京大学宗教学年報 別冊』XXVI, 2009, p. 9）

以下に訳と原文を掲載する。

凡例

- ・[.....]→録音の途切れや音声の乱れた部分。
- ・〔 〕→訳注。
- ・訳文中の鉤括弧「 」は全て、英語版にはない、訳者による挿入。文意を明確にするために用いた。

同胞の皆さん、私はこのジャン・カルヴァンの街に来て、ヨーロッパが彼の時代以来経てきた恐るべきほどの変化について思いを馳せずにはいられません。わずか 399 年前、彼がこの街の政権を握り、この地域に神権政治を樹立した時、彼はその新たな政治体制が世界全体を変容させるはずだと確かに信じていたことでしょう。と言うのも、彼は自らの使命——人類の運命をとこしえに支配せんとする神の御心に従ってこの変革を遂行すること——の正しさを確信していたわけですから。しかし、来たるべき世界が、科学と産業という近代西洋文明の二つの重大な要素によってはっきりと特徴づけられるようなものになるなどと、彼は予想——いや想像さえ——できていたのでしょうか。私には、産業資本主義の勃興を招いたのはカルヴァン自身だったという説がどれほど妥当なのかは分かりません。おそらくは、近代科学の核心である探求と実験の精神は、彼の性にはさほど合わなかったことでしょう。しかし誰の目にも明らかなのは、もしカルヴァンと彼の改革に特有の、自らの運命への確固たる信念および支配することへの強い意志の活性化の作用がなかったならば、近代西洋文明が、我々が現在見ているような動向を示すことはなかったであろうということです。

私がこのことを申し上げるのは、カルヴァンやヨーロッパ文明を論評したり評価したりするためではなく、むしろ皆さんに近代文明の起源と性質について、さらには現在東洋と西洋を分化させている諸特徴——その分化があまりに著しいため、ここにいる多くの方々が「東洋は東洋、西洋は西洋」であり、これらの流れが交わることは決してあるまいと信じていらっしゃる——について熟考して頂くためなのです。しかし、今までこの区別がそれほどはっきりしたものだったのかどうか、また永久にそのようにあり続けるのかどうかは、私には疑問です。

あなた方ヨーロッパ人は、サラセン人を東洋人として、また多少なりとも西洋の敵であるとみなしています。しかしモハメッドは、カルヴァン的な信仰や意志と通ずるものを持っていたのではないのでしょうか。サラセン文明は、科学や支配する意志という、あなた方の近代文明と通ずるものを発揮していたのではないのでしょうか。

なおもさらに遡って思い返してみてください——マケドニア軍のインドへの進軍、それに続くギリシャ文化のインドへの伝来、そして一方におけるギリシャとビザンティン様式の美術の日本にまで及ぶさらなる長旅と、他方におけるインドの宗教と哲学のアテネとアレクサンドリアへの

影響、そして言うまでもなく、アジア的な起源を持つ宗教であるキリスト教の西方への進行のことを。

これら全ての事実は、文明の歴史において極めて重要なものであり、東洋と西洋の境界線の絶え間ない変動のみならず、両者の相互影響の分岐について、我々に否応なく認識させるものであります。しかしながら、我々は単に過去についてばかり熟考するのではなく、むしろ現在の〔東洋と西洋の〕対照性に目を向けてみることに致しましょう。16世紀に始まって19世紀に頂点に達する、ヨーロッパのアジアに対する侵略は、その対照性を深刻な結果へと至らしめました。

そしてそれによって生じた衝突を今日はっきりと例証しているのが——数ある例の中からひとつ選ぶとすれば——ランカシャーの紡績工場とガンディーの紡錘との間の闘争です。

より一般的に言えば、東洋の社会生活は、家族ないし共同体の単位に堅固に基づいているのに対し、個人というものが西洋社会の基調であります。近代西洋文明は科学的ないし知的だと言えるのに対して、東洋は未だに伝統と感情に大いにしがみついているわけです。これらとその他の〔西洋と東洋の間の〕異なった特徴を分析する代わりに、私は簡潔さと対比のために、これらの特徴を大体以下のように列挙してみたいと思います。すなわち、「個人の自由 vs. 権威への服従」、「支配の精神、質量と速度への関心など vs. 受容的な態度、瞑想的な気風、そして休息と静穏への傾向など」、[.....]「探求と実験の精神 vs. 信仰と崇拜の態度」です。私は問題となっているあらゆる点を網羅しようとしているわけではありませんし、また〔東洋か西洋の〕どちらかの側の歴史の様々な局面に見られるいくつかの共通点を無視しようとしているわけでもありません。〔しかし〕いずれにせよ19世紀は、東洋と西洋の間の鋭利な対照性と衝突を目の当たりにしてきたというわけなのです。

そして東洋のいくつかの国家が近代化を経たにもかかわらず、我々は現在でさえ、これら〔東洋と西洋の間の鋭利な対照性と衝突〕を大して克服できておりません。〔しかし〕実のところ、全世界にとっての重要な問題が、この対照性の行く末に、人類の大多数をいまだに二つの文明の陣営ないし流れに分割しているこの裂け目に、関わっているのです。

このあたりで一度立ち止まり、事態を別の角度から見てみましょう。つまり、カルヴァンと彼の時代を境目としたその前後のヨーロッパ文明の二つの異なる段階のことです。東洋と西洋についての私の説明をお聴きになった皆さんの中には、ヨーロッパ文明の異なった段階や局面の間に、あるいはもしかするとカトリシズムとプロテスタンティズムとの間に、〔東洋と西洋の間の対照性と〕同様の対照性を見出すことが可能だとお考えになった方もいらっしゃるでしょう。詳細は省きますが、私はいつも東洋と西洋の区別を、西洋文明の中世と近代の対照性に関連付けて考えています。

実際のところ、何世紀にも渡り中世的な社会生活環境を生きてきた東洋の人々は、現在、近代文明のあらゆる刺激的な要素の影響によって言わば侵されている状態です。彼ら〔東洋の人々〕にとっての主たる問題は、いかにして自分たちをその新しい状況に順応させるか、またヨーロッパが過去4世紀に渡り経験してきた〔中世から近代への〕移行をいかにしてくぐり抜けるか、という点にあります。

[.....]東洋の様々な国々の間で程度の差こそあれ、この移行の段階によって掻き立てられる混乱と葛藤は、当然ながら甚大なものであります。そしてこれらの混乱と葛藤に拍車をかけるもう一つの要因こそが、近代西洋文明そのものが抱えている諸問題なのであります。私には、これらの諸問題があなたの方の社会的・産業的・政治的な生活の中のどこにあるのかについて論じる資格はありません。しかし、ヨーロッパはまったくもって安泰でありその文明には向き合うべき問題など無い、と考えるほど楽観的な人は、ヨーロッパの中にさえほとんどいないだろうと私は思います。

西洋の零落を叫ぶ声に賛同することはしないにせよ、ヨーロッパには少なくともいくつかの変化が必要である——政治的・経済的な変化だけでなく、倫理的・霊的な変化もです——ということは、誰にも否定できないでしょう。もし、ヨーロッパの現状についての私の見解が多少なりとも正しければ、あなた方は理解して下さるはずですよ。言わば中世的な生活から近代文明への移行をくぐり抜けながら、それと同時に、新たに導入された文明——科学と産業、理念と理想、政治組織と社会組織など、そこに含まれているあらゆるものも一緒に——の重大な局面にも向き合うという二重の困難に直面している、我々東洋人の気持ちを。

いかなる東洋人も、近代の機械の影響力には抗えませんが、またかつてのような休息と静寂の態度のままでいることもできません。近代産業の出現は、東洋人に伝統的な生き方や考え方の大半を捨て去るよう強制します。科学的実験の精神は、権威への服従という〔東洋の〕受け継がれ

てきた態度を多かれ少なかれ破壊してきました。これらすべて及びその他のたくさんの関連現象こそが、東洋人の「西洋化」ないし「近代化」と呼ばれるものなのであります。

もし、新たに持ち込まれた西洋文明が安定しており、それ自体に問題や困難が無かったならば、彼ら〔東洋人〕にとって問題はより平易だったことでしょう。[.....]しかし、その新たな諸要素の源泉それ自体が、危機に直面しているのです。そういうわけで、アジアの国々は二重の困難に直面しているのです。事態をこのように見てみると、それぞれの伝統と気質の違いにもかかわらず、我々は皆——西洋人も東洋人も——ほぼ同じ問題に直面しているのだと考えずにはいられません。そしてその問題とは結局のところ、いかにして近代文明のこれら全ての有益な要素を利用しつつ、同時にその差し迫った危機を克服し、今の世代の知識の限界を越えた一歩を踏み出すか、ということになります。

科学を例にとってみましょう。それは今日に至るまで、主として未知の領域への探求と新たな真理の発見という流れに沿って、またしばしば征服と支配の精神に伴われて、進歩してきました。そしてその結果、それらの発見と発明を実践的に利用するための膨大な量の応用が生まれたのです。

これが人類に計り知れないほどの利益を与えてきたことには疑いの余地がありません。しかし他方では、この探求と実験の精神と共にあるのは、精神的態度の落ち着きのなさであり、それは質量と速度を求める衝動的な欲望も同然であると言えます。近代産業というのは、そういうものなのです。それによって可能になった莫大な富の蓄積については、今やその配分に関する深刻な問題——そこには社会的正義や社会構造全体の問題までも絡んでいます——が生じています。

要約すれば、[.....]これら全てをあなた方と共有し[.....]地理的距離と文化的遺産〔の違い〕にもかかわらず、我々は共通の諸問題に直面していると言えます。国際的委員会で私なりの些細な役割を果たすことで[.....]入念な探求に相当する[.....]これらの深刻な問題を解決すべく我々の最高の知能と知識だけでなく[.....]を総動員することにおいて協力する[.....]成し遂げるべき課題の一つ[.....]世界の変わりゆく文明の不安定な[.....]の上に安全で堅固な橋を架けること[.....]あらゆる生命活動と霊的向上心を包含する生と信仰の深遠な源の状態[.....]。

祈らせてください、これらの理想が実現しますことを。そして知的協力——「知的」というのは単に知識や思考のことだけでなく、人類の向上心全体をも意味します——がうまくいきますことを。ありがとうございました。

(木村智訳)

Brothers and sisters, in having come to this city of John Calvin, I cannot help thinking of the tremendous changes Europe has undergone since his time. When he took grip of the city government just 399 years ago, and established a theocracy in this district, he certainly believed that the new regime was destined to transform the whole world as he believed in his own mission to carry out this change according to God's will ever ruling the destiny of mankind. But I wonder whether he could have anticipated, even dreamt, that the world to follow was one so distinctly characterized by science and industry, the two great factors of the modern civilization of the Occident. I don't know how much truth there is in the theory that makes Calvin himself responsible for the rise of industrial capitalism. Perhaps the spirit of search and experimentation, the kernel of modern science, was not quite congenial to him. Yet no one can contest that the modern civilization of the Occident could not have manifested its trends as we see them now without the revitalizing influence of the firm belief in one's destiny, of the strong will to dominate, also characteristic of Calvin and his reformation.

This I say not to review or to evaluate Calvin or European civilization, but in order to invite you to a meditation on the origin and the nature of modern civilization and further on the characteristics which now differentiate the Orient and Occident so tremendously that many people here believe that East is East, and West is West, and that those trends shall never meet. But I doubt whether this distinction has ever been so marked and whether it will remain so forever.

You Europeans regard the Saracens as Orientals and somewhat as enemies of the Occident. But did not Mohammed possess something of Calvinistic faith and will? Did not the Saracen civilization exhibit something of your modern civilization: its science and its will to dominate?

Go back still farther and recall the march of the Macedonian troops into India, the consequent introduction of Greek culture into India, the further pilgrimage of Greek and Byzantine art as far as Japan on one side, and on the other the impact of Indian religion and philosophy upon Athens and Alexandria, if not to speak of the westward march of Christianity, a religion of Asiatic origin.

All these facts, so significant in the history of civilization, compel us to recognize the ramification of mutual influence between East and West, in addition to the perpetual shifting of boundaries between the two. However, we shall not merely ponder over the past, but let us look at the present contrast. The aggression of Europe toward Asia, dating from the 16th century and culminating in the 19th, has brought the contrast to acute outcomes.

And now the conflicts arising thereby are illustrated glaringly by the struggle between the Lancashire mill and Gandhi's spindle, to take one instance out of many.

In more general terms, the social life of the East is solidly based upon the family or the community unit, while the individual is the keynote of the Occidental society. The modern civilization of the Occident may be called scientific or intellectual, while the Orient still clings much to tradition and sentiment. Instead of analyzing these and other differentiating features, I might, for the sake of brevity and contradistinction, enumerate these characteristics somewhat as follows: individual freedom vs. submission to authority. [A] spirit of domination, interest in mass and speed, and so forth vs. [a] receptive attitude, meditative moods, [an] inclination to repose and serenity, and so forth. [.....] spirit of search and experimentation vs. the attitude of faith and adoration. I do not mean to exhaust all the points at issue, nor to ignore some similarities exhibited in the various phases of history on either side. At any rate, the 19th century has witnessed acute contrast and conflict between East and West.

And we have even now not quite overcome them in spite of the modernization of several Oriental nations. Indeed, an important part [of the] problem for the whole world is concerned with the future of this contrast, with the gap still dividing the majority of the human race into two camps or streams of civilization.

Let me pause here, and try to view the situation from another angle. I mean the two distinct phases of European civilization demarcated by Calvin and his time. Some of you, who have listened to my characterization of East and West, may have thought of a similar contrast to be drawn between the different stages or phases of European civilization, or perhaps between Catholicism and Protestantism. Apart from details, I always associate the distinction between East and West with the contrast between the medieval and the modern ages of the Occidental civilization.

In fact the Eastern people, who have been living for centuries in the medieval atmosphere of social life, are now being invaded, so to speak, by the impact of all the stimulating factors of modern civilization, and the problem for them lies largely in the question as to how to adapt themselves to the new condition and to pass through a transition which has been experienced in Europe during the past four centuries.

[.....] Naturally the confusion and conflict fomented by this stage of transition are enormous, though differing in degree in the various countries of the East, and these are aggravated still by another factor, that is, the difficulties incumbent upon the modern civilization of the West itself. I am not entitled to discuss wherein do lie these difficulties in your social, industrial, and political life. But I think very few, even in Europe, would be optimistic enough to think that Europe is entirely safe, and that its civilization has no difficulties to face.

If not to subscribe to the cry of the downfall of the West, no one could deny that there are in Europe at least demands for some change, not only political or economical but also moral and spiritual. If my view of the present situation in Europe is not entirely mistaken, you will understand how we Orientals feel facing the double difficulties of passing through a transition from the medieval life, so to speak, to modern civilization, while facing at the same time the critical stage of the newly introduced civilization with all that is therein implied, including science and industry, ideas and ideals, political and social organization.

No Eastern people can resist the power of modern machinery, nor could [they] remain in their former attitude of repose and tranquility. The rise of modern industry compels them to disengage from many of their traditional ways of living and thinking. The spirit of scientific experimentation has more or less exploded the inherited attitude of submission to authority. All these and many other allied phenomena are what is termed the Occidentalization or modernization of the Oriental people.

The problem for them would be simpler if the newly introduced civilization of the Occident were stabilized and free from the problems and difficulties of its own [.....] but the fountain of the new factors itself is facing a crisis. And therefore, the Asiatic countries are facing double difficulties. Viewing things this way, I cannot but think that we all, both Occidentals and Orientals, in spite of the differences in our respective traditions and temperament, we all are facing nearly the same problems, amounting to the question of how to make use of all those beneficial factors in modern civilization, and yet to overcome the impending crisis and to go a step beyond the ken of the present generation.

Take the instance of science. It has proceeded up to the present chiefly along the line of search into unknown regions and discovery of new truths, often accompanied by the spirit of conquest and domination, resulting in the tremendous amount of applications of those discoveries and inventions to practical use.

No doubt, this has endowed mankind with immense benefits. But looking [at] the other side, we see that this spirit of search and experimentation is accompanied by a restlessness of the mental attitudes, verging on impetuous greed for mass and speed. Not otherwise with modern industry. The enormous accumulation of wealth made possible by it, is now facing serious difficulties concerning its distribution, involved in the question of social justice and even in that of the whole social structure.

In short, [.....] to share all these with you [.....] that we are facing common problems in spite of the geographical distance and our inheritance. [.....] in playing my humble part in the international committee [.....] amounting to deliberate investigation [.....] join hands for solving those acute problems in bringing together not only our best intelligence and knowledge but also [.....] one of the tasks to be achieved [.....] but to construct a safe and solid bridge over the precarious [.....] of the changing civilization of the world. [.....] the condition of the profound source of life and faith embracing all life activities and spiritual aspirations.

Let me pray for the fulfillment of these ideals, and for the successful working of intellectual cooperation, implying by the word intellectual not only knowledge and thinking but also the whole aspirations of mankind. Thank you.

(Isaac Gagne 氏が起こした文章を木村智が確認・修正した)

才九回国際宗教学宗教史会議日程案

月 日		午 前	午 後	夕	泊
8月28日	木	第一日 10-12 開 会 式	2-4 研 究 発 表	7,30-9,00 リセプション (カクテルパーティ)	東 京
29日	金	第二日 10-12 研 究 発 表	2-4 研 究 発 表	特別講演会	東 京
30日	土	第三日 10-12 研 究 発 表	2-4 総 会	6,00 発 日 光 行	日 光
31日	日	日 光 リ サ ー チ 日光発～東京着			東 京
9月 1日	月	シンポジウム	東 京 リ サ ー チ		東 京
2日	火	シンポジウム	東 京 リ サ ー チ		東 京
3日	水	シンポジウム	鎌倉リサーチ 夜大船発		夜 行
4日	木	伊勢着	伊勢リサーチ 伊勢発～奈良着		奈 良
5日	金	奈 良 リ サ ー チ			奈 良
6日	土	奈良リサーチ 奈良発～京都	2-5 京都シンポジウム		京 都
7日	日	京 都 リ サ ー チ		特別講演会	京 都
8日	月	京 都 リ サ ー チ		リセプション (散 会)	

THE NINTH INTERNATIONAL CONGRESS

FOR

THE HISTORY OF RELIGIONS

RESEARCH TOUR

TOKYO

Contents

- (1) Guide Book.
- (2) Research Tour Papers.
- (3) Materials presented by Religious Institutions in Tokyo.
 - (i) "A Scene of Annual Grand Festival of Yasukuni Shrine around 1930." (by Yasukuni Shrine).
 - (ii) "A Bibliography of Shinto from the oldest times till 1952" (by Meiji Shrine).
 - (iii) "The Annual Functions at Asakusa-dera Temple" "Kinryū Sairin" "Kannonsama" (by Sensōji Temple).
 - (iv) "A Guide to Risshō-Kōseikai" (by Rissho-Koseikai)
- (4) Important Notice.
- (5) Ribbon designating the group you belong to.

N. B.

- (1) Please do not fail to read the Notice.
- (2) Assemble at Sankei Kaikan by 9:00 a.m.
- (3) Motor-coaches start at 9:40 a.m.

ORGANIZING COMMITTEE

J A P A N

1 9 5 8

INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR THE HISTORY OF RELIGIONS
THE NINTH INTERNATIONAL CONGRESS
FOR

THE HISTORY OF RELIGIONS
J A P A N

1 9 5 8

GUIDE BOOK

TOKYO

JAPANESE ORGANIZING COMMITTEE
OF
THE NINTH INTERNATIONAL CONGRESS FOR THE HISTORY OF RELIGIONS
SCIENCE COUNCIL OF JAPAN

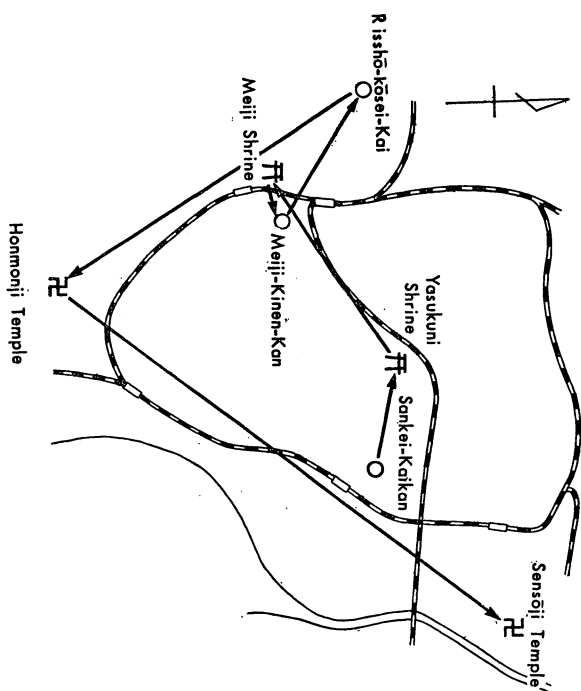
Printed by
AI PUBLISHING & PRINTING CO., LTD.
(Pan-Pacific Press)
Minato-ku, Tokyo, Japan
Tel. (50) 1421-1424

CONTENTS

I. Course of Tour	1
II. Programme	2
III. Tokyo—General Description	3
IV. Religious Institutions to be visited	5
(a) Yasukuni Shrine	5
(b) Meiji Shrine	6
(c) Risshō-kōsei-kai, one of the New Religions	9
(d) Chōeizan Honmonji Temple	11
(e) Sensōji—The Asakusa Kannon Buddhist Temple	14

I. Course of Tour

TOKYO



II. Programme (September 1, Monday)

9:00}	Discussion Meeting (at the room D in Sankei Kaikan)
9:30}	
9:40	Start by motor-coach.
9:50	Arrive at Yasukuni Shrine.
10:00}	Research.
10:30}	
10:40	Start from the South Gate by motor-coach.
10:50	Arrive at Meiji Shrine.
11:00}	Research.
11:30}	
11:35	Start from the West Gate by motor-coach.
11:40}	
12:30}	Lunch (at the dining hall of Meiji Kinen-kan).
12:40	Start by motor-coach.
13:10	Arrive at the Head Quarters of Risshō Kōsei Kai.
13:20}	Research.
13:40}	
13:50	Start by motor-coach.
14:40	Arrive at Hommonji Temple.
14:45}	Research.
15:25}	
15:30	Start by motor-coach.
16:20	Arrive at Sensōji Temple.
16:30}	Research.
17:20}	
17:30	Start by motor-coach.
18:30	Arrive at the Sankei Kaikan.

III. Tokyo — General Description

Tokyo, the capital of Japan, was called "Edo" in olden times and its name could be found in literature of early twelfth century. It was about the middle of 15th century that a castle was constructed and around it a castle-town was formed.

Tokugawa Ieyasu, the first of the fifteen generations of Tokugawa Shoguns, enlarged this old castle and made it the military center in the last years of the 16th century. After that Edo became the center of the Japanese politics and the castle town developed gradually. The old town extended from Sankei Kaikan, where is located our meeting place of Congress and Symposium, to the sea eastward.

In 1868 Tokugawa Shogun restored the reins of government to Emperor Meiji, who recovered his traditional power and moved here from the old court city of Kyoto. And Edo, now renamed Tokyo, was made the seat of Imperial Government.

Today, Tokyo is the center of national administration, education, and finance, and is also a most thriving industrial city. It is a highly westernized metropolis, but it still retains much of its ancient charm. What makes Tokyo particularly attractive to foreign visitors is its unique ability to blend the East and West, the old and the new.

Yasukuni Shrine is dedicated to those brave souls who died to defend the fatherland during the Internal War during the Meiji Restoration, the Sino-Japanese War, the Russo-Japanese War, and the First and Second World War. It is like the tombs of unknown soldiers in Europe and America, but the most different point from them is its form of shrine. And Meiji Shrine is dedicated to Emperor Meiji who took the leadership in modernizing Japan. These two shrines show the worship of man-god in Japan. In this country men of excellent ability who made valuable contribution to the world are deified after their death.

After visiting Yasukuni Shrine and Meiji Shrine, we will be invited to the lunch party held by the chief priest of Meiji Shrine at Meiji Kinen Kan. This is the historic place where the Meiji Constitution was made, and the place where we will have lunch is the hall where Emperor Meiji attended the conference.

In the afternoon, we will visit Risshō Kōsei Kai, where we can

RESEARCH TOUR PAPERS

— TOKYO —

Discussion Meeting on these papers

— at Sankei-Kaikan (Room No.3), on Sept. 1.

C O N T E N T S

	Page
I. On the Shrine-Shintō since the Meiji Restoration	
by Ken'ichi Sakamoto	1
II. Foundation and Characteristics of the "New Religions"	
by Iichi Oguchi	7
III. Belief in Hokke-kyō and its Development in Japan	
by Shōbun Kubota	11
IV. Buddhist Worship of the Masses	
by Shinjō Kamimura	15
V. Present State of Sectarian Shintō	
by Tokuichi Iwamoto	21

May we call your attention, please !

IMPORTANT NOTICE

September 1, Monday, 1958

Dear Members :

To ensure you utmost comfort and pleasure for your Tokyo tour on September 1, kindly read the following items and be guided accordingly.

1. Gathering :

Please assemble at Room No. D of Sankei Kaikan by 9:00 a. m. when Discussion Meeting begins.

2. Research :

Places where you should take off your shoes are :

- 1) The Second Exercise-Hall of Risshō-Kōsei-Kai.
- 2) Hōantō of Hommonji Temple.
- 3) Dempōin of Sensōji Temple.

3. Others :

- a) Group photographs will be taken at Meiji Kinen Kan and at Sensōji Temple.
- b) About 6:30 p. m. arrive at Sankei Kaikan to terminate the tour.
Tour adjourned at Sankei-Kaikan.
- c) Please watch Notices at each site. For instance, "No photographing within the zone" or "No smoking".

Thank you.

Research Tour Committee of I. C. H. R.

HAVE A GRAND DAY AT TOKYO !

密葬式次第

you 64
於 濱 岸 邸

司式者のことは
故人の履歴
主治医の報告
故人のことは朗讀
別れのことは
献 歌

(塚 谷)

(野 村)

(藏 田)

(戸 田)

東大宗教学研究室代表

(大 島)

東大附属図書館代表

(香 室)

日本文化研究所代表

(小 林)

遺 弟 代表

(昭 木)

友人代表

(古 野)

弔電披露

(柳 川)

奏 楽

閉式の挨拶

(塚 谷)

遺族代表挨拶

(山 本 正 一)

献 華

司式 塚 谷

進行 藤 田

東京大学附属図書館長教授
故岸本英夫葬儀次第

司 会 青 野 伊 予 児

一、奏 楽 (東京大学音楽部管弦楽団)

一、開 式

一、式 辞 葬儀委員長 伊 藤 四 十 二

一、弔 辞

東 京 大 学 総 長

大 河 内 一 男

文 部 大 臣

灘 尾 弘 吉

東京大学文学部長

手 塚 富 雄

国立大学図書館長会議

堀 江 保 蔵

日本宗教学会会長

石 津 誠 照 司 璽

友 人

茅 誠 司

チャールズ・B・フアーズ

門 下 生

柳 川 啓 一

一、在りし日の声 (附属図書館改善記念式典式辞より)

一、合 唱 (東京大学音楽部コール・アカデミー)

一、献 花

葬 儀 委 員 長

伊 藤 四 十 二

御 遺 族

参 列 者 代 表

南 原 繁

附属図書館職員代表

一、挨 拶

葬儀委員長 伊 藤 四 十 二

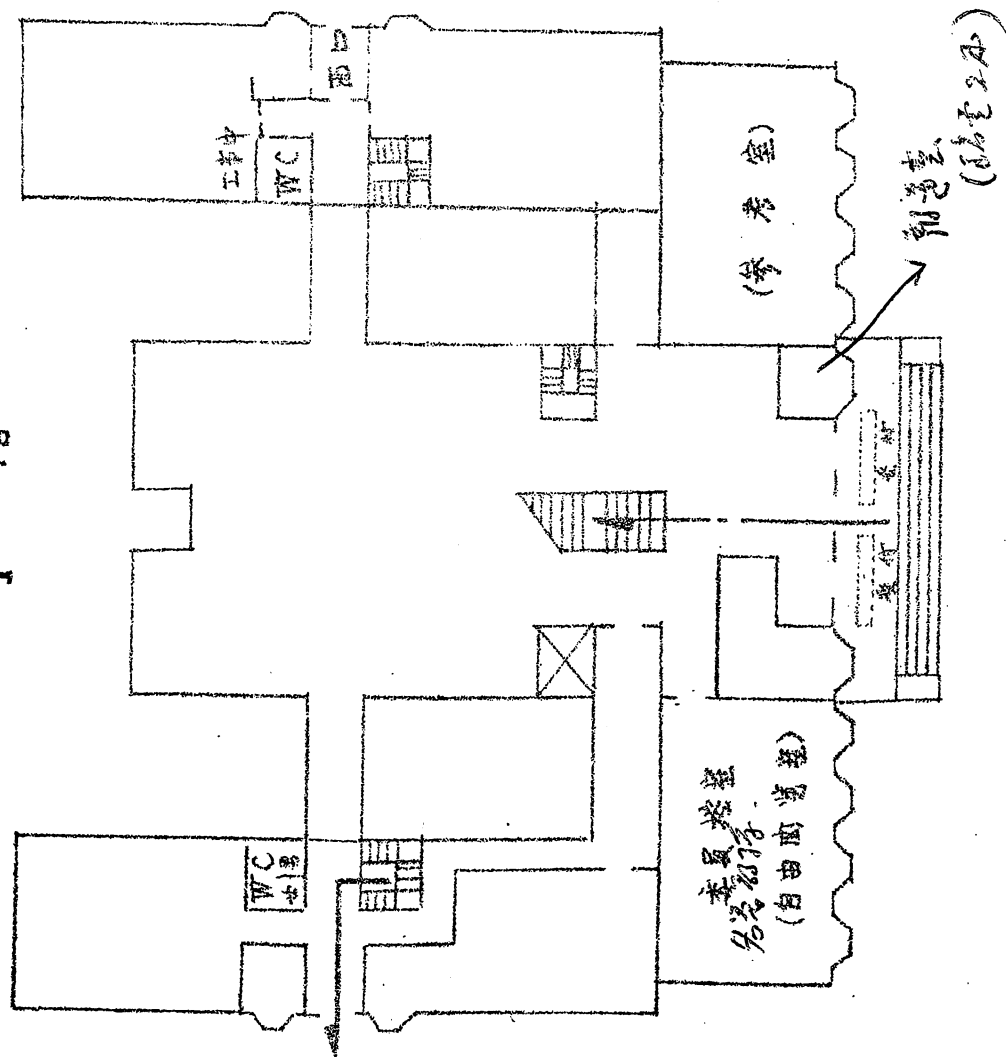
一、閉 式

一、奏 楽 (東京大学音楽部管弦楽団)

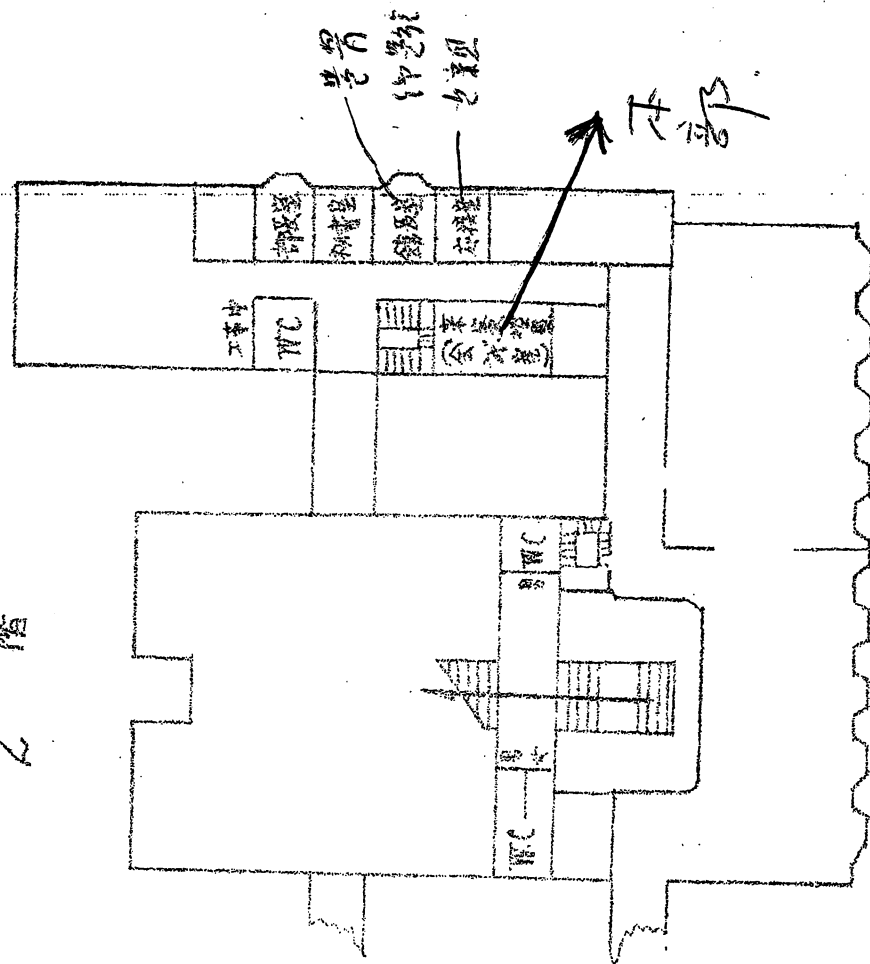
東京大学附属図書館 本館蔵書配置図

本館蔵書配置図 3階

1 階



2 階



第一層

5/10/19

(K-5-N-17-310)

創造

第15巻・第3・4合併号
毎号送料共 25 円
代価 半年分送料共 150 円
編集兼 発行所 印刷人
今岡 信 一 良
東京都港区芝公園二丁目四番地・正則高等学校内
日本自由宗教連盟
振替口座東京 73401 番
東芝印刷株式会社

故岸本教授の「無宗教葬」について

原 一 郎

メラノーマ（黒色腫）と呼ばれる悪質な皮膚癌と十年もの長い間対決して、しかもその間に常人の二倍も三倍もの充実した活動をして、先日ついに永逝された本連盟理事長岸本英夫氏の緊張を極めた生と死とは癌という病気が最近大きな社会問題になって居り、又、故人が東大宗教学部の主任教授であつたと云う事情も加わって、ジャーナリズムに大きく取り上げられ、多くの人々の深い関心を引いたのであつた。死の翌々日、故人の自宅で行われた密葬には私も出席して、最後の「お別れ」をしたのであるが、その葬儀は、当日の司式者増谷文雄教授が開式の挨拶の中で述べられたところによると、岸本氏は本質的には、非常に宗教的な人であつたけれども、現存する凡ての宗教に対して極めて厳しい批判的態度を取って居られたので、全く無宗教的な形式で行われ、すべての会葬者に一種異常な感銘を与えたのであつた。

しかし、岸本教授の葬儀がかように無宗教式で行われたことに対して、昭和二十三年以来岸本氏が理事長としてその組織と発展のために熱心に努力して来られた宗教法人・日本自由宗教連盟（最初の名称は日本ユニテリアン協会であつた）の関係者たちは、全く意外な感じに打たれ、甚だ釈然としない気持ちを味わせられ、殊に同連盟の会長今岡信一良氏は当日の葬儀に出席することを回避されたほどであつた。故岸本氏が日本自由宗教連盟という宗教団体に、創立以来理事長として熱心に努力して来られたのに、司式者増谷教授等が、その事実を十分承知して居られながら、日本自由宗教連盟の存在を全く無視して、無宗教式で岸本氏の葬儀を行ったことに対して、今岡氏等が深い不快を覚えられたのは、如何にも尤もだと思う。

しかしこの問題は、単に自由宗教連盟の存在が完全に無視されたということより以上の、もっと複雑な事情と深い意味を含んでいると思われる。故岸本教授は単に一個の宗教学者ではなく、「自由宗教」という特殊の立場に立つ宗教人でもあつたのである。「自由宗教」と云つたのは、それが一体どういう内容のものか一般の人々には見当がつかないであろうが、岸本教授の場合、それはユニテリアン系のものであつた。（なお、教授の父君岸本能武太早大教授もユニテリアンであられた。）但しユニテリアンと云つても、岸本氏のそれはキリスト教的ユニテリアンではなく、キリスト教を超えた合理主義的ヒューマニズム（人間主義）に立つユニテリアンで、神も靈魂不滅も超自然的な奇蹟も信じないものであり、昭和二十七年一月、岸本氏がNHKの「宗教の時間」で放送された「これからの私達の宗教」という講演の中で述べられた定義に従えば、ひたすら「人間の心に永遠なる理想の光を点する」ところが岸本教授の「自由宗教」の機能なのであつた。そして、そういう意味で「近代人の理性に納得のゆく」、しかも「人間生活全体を包むような大きな深い歎び」を我々に与えてくれる「洗練された」「近代的」（この二つは岸本氏が愛用して居られた形容詞である）な宗教を組織しようとして岸本氏は、日本自由宗教連盟理事長の責任を取って引受け、努力して来られたのであつた。

ところが、岸本氏の葬儀を主催したのは、日本自由宗教連盟ではなく、司式者を務められた増谷文雄教授を始め、殆どすべてが東大宗教学研究室で岸本氏と親密な関係を持つて居られた方々であつたが、それらの方々は、少くとも増谷教授は、岸本氏が決して無宗教ではなく、「自由宗教」という宗教的立場を持ち、日本自由宗教連盟の理事長としてその理想の実現に多年努力して来られたことを十分承知して居られた筈である。それでは何故に増谷氏等は、故岸本教授が「自由宗教」という特殊な宗教的立場を持つて居られたことを知りながら、故人のそういう宗教的立場を無視して、「無宗教式」で葬儀を行われたのであろうか。

私にはその間の事情はよく分らないが、その理由の一つは、東大宗教学関係の人々は、増谷氏のように純然たる仏教者か、大畑教授のようにオーソドックスの基督者か、又は宗教を単に科学的に研究しようとしてゐる非宗教人であつて、従つて、右に述べたような「自由宗教」というものに対する故岸本教授の理想や熱意に対して、十分な理解も共感も持つて居られなかったことにあるかと思われる。元来、岸本氏は、東大卒業後、米国ユニテリアニズムの思想的根拠地であるハーバード大学でヒューマニスティック（人間主義的）な宗教思想の先を受け、て来られた人であり、岸本氏が訳されたデューイの『誰でも信仰できる』コモン・フエイズという国における宗教的ヒューマニズムのバイブルと称されている書物であるが、そのようなヒューマニスティックな「自由宗教」は、我が国の宗教界や宗教学会では余りにも軽視され過ぎているように思われる。

CONTENTS

On the Non-religious Funeral for the late Prof. Kishimoto	Ichiro Hara
Poets and Religion	Akira Shimana
Bury the "Infinite"	Atsuo Imai
What is the Enlightenment of Zen?	Teiki Sugihara
An Inquirer's Diary	Kaidanji
Destruction of Mythology	Hario Kudo
In Memory of the late Dr. Kishimoto	W. P. Woodard

の考性見るしい病居るうのいか言も思にいてでは共感するに単葬儀を知視を場故偉葬ように教果や、受

あり、岸本氏の思想のそ
うい、本質又は性格が、
増谷氏等に、岸本氏の葬
儀には無宗教式が適当で
あると結論させたのだと
思われるのである。
癌の発病以前、昭和二
七年のラジオ講演で岸本
氏は「人間の心に永遠なる
理想の光を点すること」
であると述べられたこと
は、前にも書いておいた
が、「人間の心に永遠な
る理想の光を点すること」
は、言葉としては如何に
も美しいが、一体「永遠
なる理想の光」とは何か
と考えると、それは余り
に抽象的・概念的であつ
て、単なる宗教哲学者の
思索の産物にすぎないよ
うに思われ、其処には、
宗教人として激しい、厳
しい実存性が殆ど感じら
れない。
ところが、昭和二九年
に癌の発病を知って、そ
の手術を受けられてから
の岸本氏人生や宗教に
対する思索や態度から
は、そのような美しい抽
象的な理想主義は影をひ
そめて、もっと厳しい実
存性が感じられるように
なつて来た。日本自由宗
教連盟の機関誌『創造』
の昭和三十七年八月号に、
岸本氏は「死をみつめる
心」と題する短い文を寄
せて居られるが、その中
で岸本氏は、癌の発病を
知ってから御自身の心
境の四段階の展開を述べ
て居られる。その四段階
の第一は、「手負いの猪」
のようにガムシヤラには
たらくことによつて、
「それから生ずる生命の
美感によつて、襲いかか
つてくる死の恐怖に抵抗
しようとする」ことであ
つた。これは、如何にも
悲壯な生き方であつて、
私達の心を強く感動させ
るが、そういう態度は、
それだけで果して「宗教
的」と云えるであらうか。
第二の段階は、岸本氏
が死を「別れの時」と考
えるようになったことで
ある。これは、癌発病以
前のように、単に靈魂不

滅や来世の存在を科学的
合理主義の立場から否定
するのは違つて、肉親
や友人というような現実
の、親密な有縁者たちと
永久に別れる時として死
を感ずるのであるから、
人生に対する切実な実存
主義的感慨が其処に感じ
られ、その意味で、「宗
教的」と云うことが出来
よう。仏教でも「生者必
滅・会者定離」とか「一
期一会」とかいうことが
云われている。しかし、
ただ「別れ」ということ
だけを説いて、他面、何
等かの意味で、人と人と
の結びつきや融一の重要
さを考えない思想が、果
して十分に宗教的と云う
ことが出来るであらう
か。
第三の段階は、「死が
迫つて来ても、社会に対
する自分の役割と責任と
を最後まで放棄しないと
いう気持」であつたとい
う。これは真に立派な、
尊敬すべき気持である
が、ただそれだけではわ
ざわざ「宗教」と言わな
いでも、道徳又はヒュー
マニズムと云つてもいい
ものではないだろうか。
勿論それは宗教の重要な
要素であるが、宗教とし
ては、それ以外にもいろ
いろ重要な要素を含む
べきものだと思う。
岸本氏の心境の第四の
展開は、「死の恐怖に直
面しながら、静かに人生
を深く味わう心のゆとり
が出来て来たこと」であ
つたという。これは如何
にも宗教的な深みある気
持であらう。しかし問題
は人生をどのようなもの
として味わうかということ
である。特に、岸本氏御
自身の人生だけではなく、
広く他者の人生をも
含めて、「一切衆生」の
人生、「生老病死」を深
く考え味われて始めて十
分に「宗教的」と云うこ
とが出来ると思うが、此
の点について、岸本氏の
最後のお気持はどのよう
なものであつたらうか。
総じて、岸本氏の態度
は、癌以前も癌以後も、

純粋に個人主義的、自我
主義的性格の強いもので
あつて、『文芸春秋』に
掲載された令息の手記を
読むと、お子さんたちな
どに対しては非常に愛情
深いお父さんであられた
ようであるが、その宗教
理論や自由宗教連盟にお
いて実際に取られた態度
・行動から判断すると、
あの強烈な自我主義的傾
向に比べて、他者に対す
る岸本氏のアルトゥルイ
ステイック(愛他主義的)
な関心や配慮はむしろ稀
薄なものであつたように
感じられる。しかし仏教
では慈悲が、基督教では
愛が極めて大きな要素を
なしている事実からも考
えられるように、高度の
宗教においては、主体性
としての「自己」の尊重
と共に、他者への深い関
心、他者と自己との結び
つきへの要求、即ちア
ルトウルイズム(愛他主
義)が重大で且つ必要な
要素をなしていると思われ
る。
岸本教授が到達された
第四の心境、即ち、「人
生を静かに深く味う」心
境からは、若しそれが真
に深められ、博大なもの
にされたならば、他者に
対する強い関心、一切衆
生に対する大きな配慮
が、やがて必ず生れて
来ただらうと思われるの
であるが、そういうアル
トゥルイズムが、心境の
第五の展開として岸本氏
によつて表白されるに至
らないうちに永逝された
ことは、返す返すも遺憾
に思われる。
以上述べたような岸本
氏の思想の傾向・特質
が、増谷氏等をして故人
のために「無宗教式」の
葬儀を行うことを発意さ
せたものかとも思われ
る。(或いは、自由宗教
連盟主催による葬儀を行
わないことが、實際、故
人の意思であつたのかも
知れない。)しかし、あ
の日の「無宗教式」の葬
儀も、岸本氏御自身のヒ
ューマニステイックな
「自由宗教」の立場から

見れば十分に「宗教的」
な葬儀であつたのではな
いかと思う。あの葬儀が
会葬者達に与えた異常な
「感銘」がその「宗教性」
を十分に証明していると思
う。(はら・いちろう
氏は早稲田大学教授で、
創造社の代表同人。本誌
の名誉主筆。)
附記。御参考のため、
当日の「無宗教葬」のプ
ログラムを附記して置く
う。
奏楽
司式者のことば(増谷文

雄氏)
故人の履歴
主治医の報告
故人のことば朗読
別れ 献歌(「船出」の歌)
別れのことば
東大宗教研究室代表
東大附属図書館代表
遺弟代表
友人代表
弔電披露
奏楽
閉式の挨拶
遺族代表挨拶
献華(白いカーネー
ション一華ずつ)

自由宗教叢書 I “創造” 発行14周年記念論叢 価 50円 (送20円)

自由宗教運動のあらたな発展を期して識者の論文10編

を収めた面期的なアンソロジーの第1弾、

(申込は本紙編集部へ)

現代と宗教

——われら自由宗教人の主張——

発行・日本自由宗教連盟

目次：自由宗教とは何か(今岡信一良)：現代人と宗教(岸本英夫)：その他
人類を結ぶもの(原一郎)：ひとりとしての信仰(児山敬一)：その他

神話の破壊

工 藤 張 雄

復活祭はクリスマスと並んで、キリスト教の大きな行事になっている。生と死、この二つは個人にとっても重大事であるが、それが世界にとつて、あるいはその周囲にとつて重大なことが、ままある。イエスの生と死とは、当時の人ばかりでなく、その何千倍にも当るだろう後々の人にも重大問題となった。生まれた年さえ、実際より四年後に見誤っていたという歴史的事実から見て、生月日など不明であつただろうと、私は考へている。クリスマスは、冬至、復活祭は春分、いずれにしても生命の躍動し始める時である。偉人がしばしば一月一日生まれてにされているのと、大した違いはないと思つてゐる。

このような話をもちだすのは、敬虔なクリスチヤンの信仰をぐらつかせるためではない。世の一般が「キリスト」の信仰に入り、あまりにも枝葉に走りすぎることを憂へるからである。なぜ処女から生まれなければなら

ないのだ。なぜ贖罪をしなくては、信じられないのか。なぜイエスが「キリスト(救世主)」でなければならぬのか。こういう伝説めいたものの上にしか立てない信仰、それは一見強烈な感ぜがするが、偏狭であり、さらにいうならば、無意識の商取り引きですらある。というのは、そのような「キリスト」なら、自分を救つてもらへる、だから信じよう、こういう論理がどこかに働いている。

イエスは神を信ずるに当り、一切の打算を捨てていたことを、クリスチヤンはまず認める義務がある。——天の神の予定に従つて、贖罪のためにはりつけになつた——こんな甘い考えは、イエスを余りにも軽蔑した見方で、イエスの苦しみ、イエスの生き方をばかしてしまふ。イエスそのものにつき入るため、イエスにまつわる余計な神話をまず捨てよう。そうでない限り、イエスは「浮ばれ」ないはずである。

一言葉

宗教とは、信条や教義によつてあらわされるものでなく、むしろ究極的现实にむかう内省というべきものである。

ラダクリシエナン

岸本英夫博士の死を悼む

ウィリアム・P・ウッダード

五月三十一日には正則学院帰一館で故岸本英夫教授の追悼の会が催されます。本連盟ばかりでなく各方面に教授の死が如何に惜しまれるものであつたかを示すものとして、「国際宗教ニュース」誌本年第一号所載W・P・ウッダード氏の一文をご紹介します。(A)

東京大学宗教学科主任教授、当研究所理事長、その他の要職を兼ね、忙しく活動されていた岸本英夫博士の急逝は、博士が第一人者であつた宗教学界にとどまらず、各界において、深くひとびとの悼むところである。日本の宗教界や学界において、博士に匹敵する影響力をもたらし、戦前の卓越した先覚者、姉崎正治博士が偶ばれるのみである。おのおの専門分野において、同等もしくはそれ以上の功績をあげた学者はあるかもしれないが、その興味のはばひろさ、理解の深さ、影響力のひろがりにおいて、岸本博士をしるぐ人をわたしは知らない。

岸本博士が国際文化交流に著るしい貢献をされたことは、わたくしが、ここであらためていうまでもない。博士はとくに晩年においては東西文化交流に、とりわけ日本と、博士のもっともよく知つておられたアメリカとの文化交流に絶大な関心を寄せられた。そして、岸本博士は、人もしるやうに、たんなる宣伝や掛声に終始する方ではなかつた。博士は知的文化交流を通じて、真の相互理解をめざされ、日本がこのの仕事に乗り出してゆかなければ、それは実現不可

能であると考えられた。わたくしは、ここで博士の多彩な活動のほんの一端をとらえることしかできない。東京大学では、宗教学を講じられるほかに、大学図書館長として、評議員として、よくその責を果たされた。その他、日本ユネスコ委員会委員、文部省の宗教法人審議会委員、国学院大学日本文化研究所所長心得、自由宗教連盟理事長、等々、多くの要職を兼任され、最近では、国会の憲法調査委員会に、あるいは、第一、第二回日米文化交流会議に日本代表として出席された。博士の推薦幹旋によつて、アメリカの財団より日本の研究者、研究所に与えられた援助ははかりしれないものがある。

宗教学の分野においては、日本宗教学会の会長を再度つとめられ、名実ともに学界の第一人者であられたが、後進の指導にあたつては、学問上の得難き師であるのみならず、卒業後の就職や海外留学の世話まで、常にあたたく手をさしのべられた。日本の宗教の複雑な様相を理解しようとする外人学者は、博士に教えを乞うのがきまりになつてゐた。博士の手帖は、ずっと先まで、このやうなひとびとの面会予定がぎっしり書きこまれて

いて、急ぎの新たな予定が書き加えられるときは、既定の予定の間に、文字通り、わりこませるしか方法がなかった。多忙な日程をやりくりして、博士は一人でも多くのひとびとに会おうとされ、事実、それは博士の時間と体力の許す限界を越えていたのである。

非常に広汎な分野に、さまざまな業績を残された岸本博士を、ある一点から賞讃することは適当でないかもしれないが、わたくしがとくにあげたいのは、占領時代の日本に、つくされた功勞である。昭和二十年十月、占領行政開始後まもない頃、博士は、文部大臣に宗教の自由と政教分離確立などをめぐる宗教行政の顧問に就任するよう要請された。学生生活を継続することを強く主張された博士は、東大助教授の地位に あつたまま、総司令部の民間情報教育局の顧問として変動期の難局打開に尽力された。とくに、民間情報教育局長ダイク代将(Kenneth R. Dyke)と宗教行政担当官ベンス大尉(E. P. Pence)に協力され、総司令部の道政策に有益な数々の助言を与え、総司令部側の担当官に日本の宗教や宗教教団、宗教界の問題についての正しい知識と理解をもたらし、非常に力をつくされた。英語に堪能な博士が、助言者として、通訳として、すぐれた働きをされたことはいうまでもない。

その当時なされた多くの重大決定において岸本博士の意見が相当の比重をもつていたとは必ずしもいえない。当時の情勢は大変複雑で、相反する利害があまりにさまざまであつたので、行政官でなければ、直接決定を左右することはできなかった。しかしながら、日本政府と総司令部と日本宗教界の、あらゆる関係者への助言者として、博士は、その重責にこ

上ない才智をもってあた
られた「戦後宗教復興」P
上出版社 参照。
就中博士の当研究所へ
の貢献は特筆にあたいす
る。博士はこの研究所を
国際相互理解を確立する
ために築かなければなら
ない無数のかけ橋の一つ
と考えられた。わたくし
が初めてお目にかかった
のは、昭和二十年に、博
士が当時民間情報教育局
のあったNHKの放送会
館へ足しげく通ってこら
れた頃であった。昭和二
十八年秋、当研究所が正
式に設立されるに先立っ
て、博士は協力を約さ
れ、当初は評議員に、そ
の後所長に、そして昨年
は理事長に就任された。
この十年間、研究所の事
業の継続、発展を可能に
した財政的基礎が固めら
れたのは、ひとえに岸本
博士の功勞の賜である。
創立以来、昨秋、不治の
病の床につかれるまで、
博士は病いとその他の激
務にもかかわらず、当研
究所に絶えざる指導と援
助を惜しまれなかった。
博士が逝かれた今、わた
くしたちは、今更なが
ら、その卓越した洞察力
と創造力をいたんでやま
ない。
この十年近くの間、博
士は、現代医学が根治し
えない、不治の病にむし
ばまれていたことを承知
しておられた。したがっ
て、寿命があつて何年、い
や何ヶ月もないことを充
分承知されたりえて、ひ
とびとのために、自己の
理想のために、異れる文
化、宗教の相互理解実現
をめざして、なにびとも
及びがたい献身的努力
を、最後まで続けられ
た、博士の功績と、とく
に当研究所の事業推進に
傾けられた、倦むことを
知らぬ情熱に、わたくし
は心からの感謝の念を捧
げたい。とりわけ御遺族
のかたがたに、当研究所
の役員、職員一同は謹し
んで哀悼の意を表するも
のである。

昇天のあいさつ

帰一教会員、故貴山たかし氏は、死が近
づくにあたって今岡信一良先生のもとへ書
状でつぎのような他界のあいさいを送って
こられました。すでに死去された氏の冥福
を祈ります。(A)

今岡信一良先生

長らく御世話様になりました。有難う御座い
ました。この辺で御先に失礼させていただきます。
此の手紙は前から用意して置いたものです。
一言、御礼を言いたかつた為です。先生は一
〇〇才までも、それ以上も長生きして下さい。
私は怪我した時から計算すると五十年以上も
余計に生かして頂きました。神様に感謝して
居ます。此頃は三界は住み難くなり、私自身
も生きる資格のない事を確認しました。神様
は死界に來いと御案内下さるので参ります。
三界は地獄も極楽もあつて面白い処であると
は思いますが止むを得ません。色々教えて下
さつて有り難う御座いました。私は自分の考
え通りコンモンスピリットとなつて此の宇宙
に居る筈ですから決して悲しまないで下さい。
むしろ私の往生を祝福して下さい。左様奈良。

貴山 たかし

宇宙ロケットが発射され、情報理論が芸
術の創造活動を助け、平和共存の思想が流
動する世界のあらたな文化的統合の基盤と
なりつつある今日、宗教とは、信仰とは、
なにものでありうるのかという問いが、徹
底的に問われています。今日ほど宗教的人
間が、自己との、他者との、状況との対話
において、誠実と勇氣を要請される時代は
なかったようです。この認識をふまえて自
由宗教運動を自覺的にもりあげてゆくため
に、「創造」はすぐれた論稿をあつめなけ
ればなりません。本連盟会員に限らず、広
く一般の方々の積極的な紙上参加を切望し
ます。

シャボンの生涯

長瀬 富郎

シャボン屋のぼくは、
いつも思うのだが、シャ
ボンの生涯で一番はなや
かなのは、女子工員さん
たちに美しく包装しても
らい、工場の門を出、店
頭に並んだときであろ
う。
けれどもそれは、シャ
ボンの生涯の『いのち』
のクライマックスではな
いのである、シャボンが
本当にシャボンとしての
生きがいを感じるのは、
シャボンが垢やよこれと
とけ合つて、流れてゆく
その時なのである。

とけてなくなるとき
に、『いのち』が生きる。
不思議なようだがそれが
事実なのである。
シャボンは、あるいは
『自分とはとけることのな
い石に生れればよかつ
た』と思うかも知れな
い。だが、シャボンには
シャボンの位、石には石
の位がそなわっているの
である。
ものの価値というもの
は、時間や空間の長さや
大きさには関係がないの
である。別の次元であ
る。瞬間が尊く、無に帰
することが生きることな
のである。石炭だつて完
全燃焼する石炭が立派な
のである。人間だつてそ
うなのではなからうか。

編集後記

いよいよ暑くなりまし
た。この時節に三月四月
合併号とは誠にお願いし
たいです。五月号の編
集をできるだけ早くおえ
て、遅れをとりもどす予
定です。

本年八月オランダのヘ
ーグで開かれる国際自由
宗教連盟第十八回国際会
議には、このたびも今岡
先生が出席される予定で
す。他に上智大学教授野
間海造氏、日本女子大教
授野見山不二氏、同じく
日本女子大の柴谷邦子氏
なども参加されるようで
す。また現在アメリカの
セントローレンス大学留
学中の井上秀夫氏も便り
で自分でもできれば参加し
たい意向を伝えておられ
ます。

日本自由キリスト教会
の赤司道雄氏は、イスラ
エルのヘブライ大学に留
学されていますが、この
七月半ばから九月半ばに
かけての約二カ月にわた
つてイスラエルに派遣さ
れる日本オリエント学会
学術調査団に参加されま
す。最近赤司氏から今岡
先生へ寄せられたお便り
はつぎのようなもので
す。(A)

「こちらの生活も一カ月
半がすぎました。自分の
勉強と発掘の準備と見物
と欲張ったスケジュール
で、仲々意のままになり
ませんが、それでもほぼ
この国の隅々まで見て回
ることができました。今
週末イスラエルの南端、
紅海の北岸エイラートル
へまいります。この四
国ほどの小さな国は、こ
れで東西南北の端々に行
ったことになります。聖
書学の上からも、世界情
勢の上からも、興味ぶか
い国で、いちど「創造」
への寄稿をゆつくりまと
めてみたいと念願してい
ます。五月六日、エルサ
レムにて。」

計報

○伊藤精次氏(東京帰一
教会員) 去る三月十六日
死去。享年八十七才。昭
和二年から十六年につ
て文部省内に仏教音楽協
会を創立、仏教音楽運動
の推進者である伊藤完夫
氏の先輩にあたり、この
運動の先覚者であった。
○貴山たかし氏(東京帰
一教会員) 去る三月六日
死去。享年六十八才。